

お天気解説

アキラのズバツと

東京地方の気候変動シリーズ
“Now & Then”

ヒートアイランドは最低気温に顕著

令和6年2月2日

江戸川区気象防災アドバイザー 藤井 聡

ヒートアイランドは主に車や暖房等による排熱が原因となって都心部を中心に気温が上昇する現象であることを前に紹介しました。今回は、東京都心と郊外で気温がどのくらい違うのか比べてみましょう。

気象庁では、毎日の最低気温、最高気温の1か月平均を算出し、平年と比べています。今年の1月は暖かかったですが、東京都心の最低気温の平均は2.9℃、最高気温の平均は11.7℃でした。どのくらい高かったのか、平年（下記表）と比べると、最低気温は1.7℃、最高気温は1.9℃も高かったことがわかります。

月		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
最低気温	府中	-0.7	0.3	3.7	8.7	13.8	18.1	22.2	23.2	19.5	13.5	7.1	1.6
	東京	1.2	2.1	5.0	9.8	14.6	18.5	22.4	23.5	20.3	14.8	8.8	3.8
最高気温	府中	9.9	10.8	14.0	19.2	23.7	26.3	30.3	31.6	27.6	22.1	16.9	12.2
	東京	9.8	10.9	14.2	19.4	23.6	26.1	29.9	31.3	27.5	22.0	16.7	12.0

表：府中と東京都心の最低気温・最高気温の平均 月ごとの平年値（2021年 気象庁データより）

さて、この平年値を東京都心と、郊外の観測点である府中を比べてみましょう。両地点の1月の平年値を比べると、最低気温は府中が-0.7℃に対し、東京都心は1.2℃と差が2℃くらいあります。しかし、夏の最低気温の差は0.3℃ほどです。このようにヒートアイランド現象は冬の最低気温に現れやすくなります。また、近年では夏場の最低気温が25℃を下回らない「熱帯夜」の日数も都市化につれ増大しています。都心の熱帯夜の日数は、1960年代は平均すると1年間に約15日でしたが、2010年代は約35日もありました。

ヒートアイランド現象の進む都市では、湿度が小さくなる（乾燥する）傾向があります。この傾向は名古屋や京都などの地方都市でもはっきり現れています。東京都心では梅雨時の湿度が昔と比べて特に小さくなっており、年間の霧日数がぐっと少なくなっています。昔の東京は、梅雨といえばジメジメしたうすら寒い日が多く、私は小学生の頃、霧の中を登校

していたのを覚えています。このごろのヒット曲に「夜霧よ、今夜もありがとう」「霧にむせぶ夜」などタイトルや歌詞の中に霧が登場する曲がよくありました。これらの曲がヒットした1960年代は、東京の年間の霧日数は30日前後ありましたが、今はほとんど無く、多い年でも2日程度です。次回は、「春一番」は早くなっているのか？というタイトルでお送りします。

日付	今日 02日(金)	明日 03日(土)	明後日 04日(日)
東京地方	曇	晴後曇	曇
降水確率(%)	-/-/10/10	0/0/10/10	40
信頼度	-	-	-
東京 気温 (℃)	最高	7	10 (5~12)
	最低	-	3 (1~4)

東京地方の週間天気予報より

気象庁HPから抜粋

（日曜日は曇って寒くなりそうですね。）